

ふじと わたり
藤戸の渡

出典 平家物語 卷十 作詞 早川紫陽 作曲 初代橘旭宗

一の谷から追われた平家一門は、本拠地である屋島に退去し、瀬戸内の島の一つ、児島にも陣を構えています。源範頼を大将とする源氏は、児島の対岸の藤戸に陣をとりましたが、船を手配できないまま日々を送っていました。一方、屋島から兵船を率いた平行盛らが、しきりに挑発を仕掛けてきます。児島に渡る手立てを探っていた源氏の佐々木盛綱は、秘かに一人の浦人から、島に渡る浅瀬の場所をさぐり出します。はたして、武勇を誇る盛綱は、白波を立てながら馬で海上を渡りきり、行盛ら平家を追い落とすことに成功します。

實に塞翁が馬に似て 昨日の淵は今日の瀬と

変わるも早き飛鳥川 流るる夢の浮世かな

保元平治の其の後は 暫し隠れし白旗も

天運巡る時を得て 東の空にひるがへり

朝日の昇る勢ひにて 源氏次第に攻め寄せれば

平家は京都遠近の 西の浦曲に漂泊ひて

赤旗夕陽に照りそへど 傾く運ぞ是非もなし

源氏追手の大將軍 蒲の冠者範頼は

備前児島へ着かれしが 湾隔てし向ふには

平家の大将左馬ノ頭行盛 選りく二千餘騎

海を頼みに備へつゝ 扇を開きて魔き

源氏渡せと罵れど 翼なければ越え難く

睨み合ふてぞ暮らしける かゝる中にも佐々木三郎盛綱は

必定浅瀬やあるべしと 求食出したる浦人に

委細を問へば答ふる様 月の上浣は東に瀬あり

大根の渡と申すなり 月の下浣は西にあり

是ぞ藤戸の渡なり 今は葉月も末なれば

藤戸こそ瀬にてあるべけれ 波音高く侍るぞかし

いざ嚮導と打連れて 人目を忍ぶ夕闇に

悉く瀬踏みなしけるを 知る者絶えて無かりける

翌れば二十六日に 復もや軍扇さし翳し

平家方より打招けば 盛綱さこそと躊躇はず

いと華やかに扮立ちつ 連銭葦毛の駿馬には

金覆輪の鞍を置き 驤引締め韁を繰り

海へザンブと乗入るれば 続いて郎黨十四五騎

主に後れず打入れける 大將軍を始めとし

呆れ果てたる源氏方 佐々木止めよと口々に

過ちするな馬上にて 海乗り渡す法やある

返せ戻せと呼はれど 沖吹く嵐と聞き流し

浅き處は駒を立て 深き處は游がせつ

左巴や右どもえ 渦巻く潮を巻き解し

高き波には踊り越え 低き波には乗り下ろし
蹄に蹴立つる白波は霧の籬と思はれつ
旭に映る緋絨の 鎧きらめく許りなり

あれよあれよと此岸より 源氏は頻りに危ぶめば
彼岸に平家は侮りて 少時眺むる其内に

難なく渚に打上り 鎧踏ん張り大音聲
馬にて海を渡したる 先陣の大將を誰とか見る

忝くも宇多天皇の後胤
近江源氏に然者ありと云われたる

佐々木源三義秀が三男 同じく三郎盛綱なり
我と思はん者共は 組めやくと喚はつて

蒐入りく攻め戦ふ 源氏の軍兵之を見て
佐々木討たすな續けよと 浅瀬を追ふて五千余騎

先を争ひ打ち渡れば さすが海ゆえ渡さじと
思ひ延びたる平家方 事の意外に驚きて

関を作りて駈け合せ 力を限りに戦へど
命知らずの阪東武者 攻めつけく蒐寄すれば

平家はこゝも保ち兼ね 復び船に取り乗つて
屋島を指して逃れけり 川さへ難きに海の上を

駒にて渡せし功績の 例しは和漢兩朝に
類ひ稀なる事ぞかし 藤戸の渡蓼々と
波音高く末代に 譽は響き渡りけり
譽は響き渡りけり